

## 「発心集」 卷四卷頭部の意味

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/7123">http://hdl.handle.net/2297/7123</a>

# 『発心集』 卷四卷頭部の意味

山本 一

## 1. はじめに

本稿では、『発心集』の作品論的読みの一環として、卷四卷頭部の三説話の意味を中心に考えてみたい。

卷四卷頭の最初の二話は、「説誦仙人」と呼ばれる超人的な存在を描き、その伝奇的性格の点で、『発心集』中やや特異と見られる話である。広田哲通氏に、「原形本に存在していたか否かの疑問をいだけせる。」<sup>(1)</sup>という指摘が有る。また木藤才藏氏はこれらの話に序文の編集方針からの逸脱を認め、そこから卷三と卷四との間に成立上の断層を想定した(のち、卷三卷末から卷四卷頭への説話配列上の連続性についての浅見和彦氏の指摘を考慮して、卷三卷末二話の前まで切れ目を繰り上げる案が示された)<sup>(2)</sup>。一方、木藤氏の説を意識しつつ、卷四以下もまた序文との深い関連のもとに書かれたいわば第二部であるとする原田行造氏や青山克弥氏<sup>(3)</sup>の説も有る。本稿は、これら先学諸氏の論に対して直接に見解を述べようとするものではなく、むしろ説話そのものの読みに立ち帰ることを意図している。

『発心集』は概して言えば思想性・主題性の明確な説話集であって、編者の説話に対する関心は、話末評言や説話の表現方法・配列などを通してかなり明瞭に窺うことができるし、その関心じたい、

遁世者・往生希求者としての自省と密接な関係に在るものにはほぼ限定されている。しかし、表面からは編者の関心が明瞭に察知できないような説話もたしかに有り、卷四卷頭の二話などもその例であろう。この種の説話を後補説話と見たり、編者の関心の逸脱と見たりして、『発心集』におけるいわば非本質的部分として処理することもひとつの方法ではあるが、それ以前に説話したいを十分に吟味してみなくてはならない。表層では目立たない隠れた脈絡が、『発心集』の中心的な主題に説話を結びつけている場合も有ると思われるからである。そして逆に言えば、表層的にはいかにも『発心集』的に見える説話であっても、読み込んでみると形骸的なつながりをしてか『発心集』的主题に対して持っていないといった場合も無いとは言えない。

江戸期版本と近世初期写「異本」以外の伝本を知り得ない現状では、かえって重要になるのが各説話の作品論的(説話集をひとつの作品として捉えるという意味での)読みであり、その上で現存『発心集』をひとつの統一体として理解することの可能性と限界とをにらみあわせながら、増補や段階的成立などの成立論上の仮説との接点を探られるべきものであろう。もとより本稿は卷四卷頭部のひとつの読解の試みというにすぎないが、見通しとしては右のような方法論に立とうとするのである。

## 2、法華読誦仙人譚の問題点

流布本巻四の最初の二話、38・39話（以下説話番号は籙瀬一雄氏編『鴨長明全集』の通し番号による）は、深山に隠れて経を読みつつ超人的能力を示す者の話である。

38話では義叡という修行者が大峰から金峰山への途次で道に迷ったあげく仙境めいた一角に到り、草庵とその中で、『法華経』を読む僧を見出す。話をすると、僧は老齢であると語るが、その姿は若い。美しい童子が給仕にあたり、夜ふけには異形の者たちが礼拝に集る。義叡は、これらの不思議がいずれも『法華経』中に説かれた持經の功德の、言葉どおりの実現であることを教えられる。翌朝、僧が加持する飛行する水瓶に導びかれて、義叡は人里に帰りつく。

この話は、『法華験記（大日本国法華経験記）』上第十一とほとんど同文であり、話末に「記トテ彼此シルシ置ケル文アレド事繁ケレバ覚ルバカリヲ書タルナリ」と記すものの、実際には、『法華験記』を書承していると判断される。

39話では、著名な験者浄蔵がある時飛鉢の行をしていたところ、別の飛鉢が来て浄蔵の鉢の中味を奪い去って行く。不審に思つて追跡すると、山深く美しい一角の草庵に経を読む老僧を見出す。浄蔵が来意を告げると、僧は給仕の童子を呼び、鉢の中味を横領した事の不当を叱責し、浄蔵には不思議な果物を饗応する。話の型も要素も、前38話と対応する点が多く、二話を一対と見ることができ、39話の中に、『法華経』の名は出てこないが、話末に浄蔵の言葉として、「ソノサマ只人トハ見ヘザリキ。読誦仙人ナンドノ類ヒニヤ、

トゾ語りケル」が在り、編者はこの話をも法華読誦仙人譚として収録していると見られる（この話の同文話が『古事談』僧行にあり、書承関係は両書の成立の先後問題じたいが未解決であるため速断できないが、話末の浄蔵の言葉は『古事談』に無く、『発心集』編者の編集意識にもとづいて付加された可能性も有る）。

実は巻三巻末の37話も、稚児が法華読誦により仙人と化す話であり、37・38・39の三話が法華読誦仙人譚のグループを成す。36話と37話には小児の信仰心という共通要素が有り、36から38話は二話一類となっていて、形態上は後補のあとを指摘しにくい。また、この部分に形態上の断絶が認められないことは、流布本の巻分割にそれほど大きな意味が無いことをも示唆する。本稿では、便宜上、流布本によつて「巻四巻頭」といった呼称を用いているが、私自身は流布本の巻構成を作品理解の上で重要なものとは考えていない。他面、38・39話を欠く異本の形態を重く見ることも、この配列の連続性からすれば難しいように思われる。もともと、配列に留意した増補作業というものが想定し得るから、以上により後補等の可能性が積極的に否定されるわけではない。

さて、38・39話が『発心集』中で或る異質さを感じさせるのは、二話ともに編者の主体的関心を語る評言の類を全く欠いており、内容的にも、編者の実践的関心との接点を持たないように見えるからである。もちろん、たとえば『法華経』への関心を長明が持つことは、彼の天台浄土教の信仰から見て当然の事であろうし、『方丈記』の著者が仙郷に憧れを持ったとしても不思議ではなからう。しかしそのような間接的な説明では、『発心集』という作品じたいの性格にそくしてこの二説話の意味を理解することには程遠い。はたして

この二説話は『発心集』中のいわば非本質的な部分なのであろうか。そのように言える面は確かに有る。しかし私見では、決して『発心集』的なものから遊離しているのではない。そのことを、以下、説話の読みによって示してみたい。

### 3、出奔した弟子（38話）

38話の主人公の僧は、義叔に向つて自分らの来歴を次のように語る。

我、本ハ叙山東塔ノ三味座主ノ弟子ニテナンアリシカ。然アルヲ、イササカノ事ニヨリテ、ハシタナクサイナマレシカバ、愚ナル心ニテカシコニ迷ヒアリキテ、定メタリシ所モナカリキ。ヨハヒヲトロヘテ後、此山ニ跡ヲドメテ、今ハココニテオハラン事ヲ待ツ也。

三味座主とは康保二年（九五六）第十七代天台座主となつた喜慶である。主人公がこの僧のもとを出奔した動機は、些細な失策を師に厳しく叱責された事、すなわち師との人間関係の破綻である。この面から見るとこの出奔は、延暦寺という權威のもとでの仏道修行の挫折であり、僧としての栄進の道からの脱落であつたと言えよう。他面、孤独の放浪と修行の後に法華持経者の功德を現身に受けた結果から見れば、この出奔は、より高い仏道修行を求めての大寺院からの遁世、すなわち再出家に他ならなかつた。

再出家に対する強い関心は、すでに『発心集』巻一に頭者に現われていたことは言うまでもない。そこでも、再出家という行為が、単に世俗的諸価値の厳しい拒絶という理念の故にのみ称讃されてい

たのではない。編者の個人的体験（『方丈記』に暗示される社会的人間関係の中での苦悩と不如意、『源家長日記』により知られる挫折と出奔）とそれにまつわる自意識が、説話主人公の上にひそかに重ね合わされていたと見られる。<sup>6)</sup>それを思えば、38話の主人公の来歴が編者の関心を強く引きつけたことは想像に難くない。意志的に大寺院を離脱する巻一の再家者たち以上に、挫折から出奔を余儀なくされる38話主人公には編者のひそかな共感を誘う要素が有つた。

長明が『法華験記』のいくつかの説話仙人譚の中から特に主人公の来歴に注目してこの話を採取したのか、何らかの理由でたまたまこの話だけが長明の目にとまつたのかは判らない（長明が揃い本の『法華験記』を座右に置いて自由に利用し得たとは必ずしも考えられず、借覧し得た折に興味を引かれた話を抜き書きしておいたものであろう）。しかしいづれにせよ、仙人の超人的能力の描写のみに彼の注意が奪われていたと考えるのは皮相であらう。それは、直前の37話との関連からも言い得る。

37話は、興福寺松室の僧のもとに居た稚児が失踪し、後に仙人となつて僧と再会する話である。失踪の理由は明記されないが、『法華経』説誦に熱心な稚児を、もつと広い学問をするようにと僧がいましめた事が記されており、師との関係の齟齬が暗示されている（『本朝神仙伝』などの類話を考えに入れて、愛情関係の冷却を原因と想像することもできよう）。37・38話を並べると、師僧との関係破綻による大寺院からの出奔という共通の要素が浮かび上る。単に「説話仙人譚」という共通性のみによつた配列ではなかつたのである。そしてこうした要素は、長明個人にとどまらず、多少とも世俗社会での不如意や挫折をくぐってきた多くの遁世者たちの心情をも、吸収

するものであったと思われる。

のみならず、大寺院からの脱落が、結果として仙化という大寺院にも優越する達成を見たと、両話共通の構図は、編者やその周辺の通世者たちが抱いていた、大寺院の権威に対する一種の批判的心情にかなうものであった。『発心集』においてこの種の大寺院批判は、巻一の再出家譚群では「名利」批判の形で、序文や35話などでは「智者」批判（寺院教学の批判）という形で見出される。37話・38話においては、具体的な文言としてではなく、話の構図じたいに価値観として潜在しているのである。

#### 4、独居修行者と大寺院（39話）

大寺院への批判的心情は、次の39話においても隠れた基調となっている。

前話と異なり39話においては、仙化した主人公の来歴については何も述べられない。逆に、仙人を来訪する側の浄蔵は著名な僧である。39話では、冒頭に「善宰相清行ノ子、並ビナキ行人也」と紹介されるにすぎないが、『拾遺往生伝』等にその法力を示す逸話が多く見え、すでに周知であったと思われる。

39話の浄蔵は、「山ニテ」飛鉢の法を行ない、仙人に対しても「比叡ノ山ニスミ侍ケル行者」と名乗っているように、いわば延暦寺の権威を荷って登場する。しかし、彼の加持力は主人公に対して全く歯が立たない。浄蔵の鉢の中味を奪ったのは護法童子とおぼしき童子であり、この童子の力が既に浄蔵の法力をいわば愚弄する程のものである。これらの者を自由に使役している主人公の仙人の力は、

さらにこれを大きく上回るものと想像しないわけにはいかない。

編者や周辺の人びとは、来歴不明のこの主人公に対しては、38話の主人公に対してのような親近感を抱き得なかったかもしれない。そうとしても、大寺院と隔絶した独居修行の僧が、比叡山を代表する験者を軽くあしらうという話の構図を前にすれば、独居修行者に肩入れして溜飲を下げることはできた。38話の直後に置かれたことで、そのような効果は増幅されたのである。（ここまでの論旨は、86年12月20日、北陸古典研究会研究発表会で口頭発表した。当日、御意見をいただいた同人諸氏に謝意を表する。）

#### 5、構図の逆転（40話）

次の40話は、右に見てきた38・39話の性格に対してどのような関わりを持つのであろうか。

永心法橋という僧が、清水寺に詣る途中、橋の下に人の泣いているのに気づき事情を問う。乞食の「カタワ人」が、身体の苦痛の耐え難さに川水で足を冷やしていたのである。彼はかつては比叡山の学生であったが、「カタワ人」となつ後は別の「ワタワ人」のもとに身を寄せ、毎日酷使されている。今夜は、身体の痛みに眠れぬまま、この苦しみも過去生の逆罪の故であることを思い、一方では天台宗の教えに「唯円教意、逆即是順、自余三教、逆順是故」と在ることを想起して、それにすがる思いで泣いていたのだと言う。永心は「我が一山ノ同法ニコソアリケレ」と深く同情して、「逆即是順」の教理を懇切に説き聞かせて別れる。

この話にやや類似する話が『古事談』『宇治拾遺物語』に見える

が、そこでは、智海法印なる僧が、清水寺からの帰途に橋の上で、「唯  
円教意」以下の文を誦する。「白癩人」に出会い、法文を談じてその  
学識に圧倒されるという筋になっている。これらの説話に関連する  
問題については山本節氏の論が有る。また、「今昔物語集」巻二十  
一第三十五話等を含め、説話集やその他の資料に見える、清水坂に  
集住した被差別民・乞食・傷病者の問題については、横井清氏、池  
見澄隆氏<sup>(9)</sup>が論じている。ここではしかし、「古事談」「宇治拾遺」  
の話と40話との相違点、と言うよりもその色彩の相違に注目してお  
かなければならない。

「古事談」「宇治拾遺」の話は、この白癩人を「化人か」と推測  
することはで結ばれ、底辺の被差別者の姿をまもって仏菩薩が顕現  
するという神秘的説話の一つの型に属するものになっている。一方  
の40話には神秘の影は無く、有るのは実際の人間の悲惨なありよう  
である。

我、カタワニ罷ナリニシ後、シレル人ニモ悉ク別レテ、立寄ル  
所モ侍ラヌニヨリ、先ダチテカタワナル人ノ家ヲカリテソコニ  
ヤドリ居テ侍レバ、ヒルハヒグラシト云バカリセタメ使ヒ侍リ。

以下、主人公が語る生活の様相は具体的で現実感を帯び、話をし  
めくくる「年比経ヌレド忘レズ」という永心の感懐もまた、きわめ  
て自然な人間感情の吐露である。

40話の現実的性格は、「古事談」などの話と対照的であるのみな  
らず、直前の38・39話とも著しい対照を見せている。主人公が誦す  
る「唯円教意」云々は、天台大師の「法華経」注釈書「法華文句」  
をさらに章安大師が注釈した「法華文句記」の文であり、37話から  
40話までの四話には、「法華経」という共通要素が有ることになる。

しかし、そうした共通性の指摘だけでは、「発心集」の説話配列の  
意味の理解としては不十分なのである。ここではむしろ、40話と38  
・39話との間の対照性にこそ注意する必要がある。

40話の主人公は、何らかの理由で（横井氏が示唆するように、病  
気や身体障害により放逐されたとも考えられるが）延暦寺での学問  
修行を断念せざるを得なくなり、いまは生活苦と病苦の中で天台の  
教理に辛うじて救いを見出し出している。それも、現在の苦悩の原因  
である過去の逆罪が、教理上はそのまま仏縁でもあるという事から、  
いずれかの未来世における救済の可能性が導かれるというに過ぎ  
ない。たとえば38話の主人公が、同じく延暦寺を去った者でありな  
がら、「法華経」に説く所を現身に実現していることに較べると、  
その落差はあまりに大きい。しかし両話は、陽画と陰画のような、  
或いは構図の逆転とも称し得るような、対応する対照を形作ってい  
るのである。38話（39話も）が、編者を含む遁世者たちを満足させ  
るいわば天上的な夢であったとすれば、40話はまさに彼等の地上的  
現実であって、彼等の自己意識の両面をこれらの説話は代弁してい  
たと思われるのである。

編者たちの生活の実態は、40話の主人公ほどには悲惨ではなかつ  
たかもしれない。しかし、「身の乞がいとなれる」という自己意識、  
仏道修行の遅滞を前世からの「貧賤の報」かと疑う発想は、「方丈  
記」著者のものであった。すくなくとも主観の上では（或る程度は  
客観的にも）、彼等にとつて40話の主人公の境遇は他人事ではな  
かった。それ故に、40話のような地味な説話が、「古事談」型の話と  
はまた別に、遁世者たちの間で伝承されることも起り得たのであ  
る。

38・39話の直後に対照的な40話が置かれていわばバランスが取られている点について言えば、編者の個性との関係が考えられる。自己主張の高揚の直後にその反動として自己批判を演出するといった性癖（最も顕著なのは『方丈記』末尾であるが）が、長明には見受けられるからである。<sup>101</sup>『発心集』の説話配列は、いわば編者の思考の軌跡を表現しているという面が有り、その意味でこの種の要因の作用も無視できないと思われる。

## 6、残された問題

以上で、本稿の当初の課題である巻四巻頭三話の意味については述べ終えた。同時に、長明編の『発心集』に既にこれらの説話が存在したと見る私の立場も明らかになったであろう。しかし、この部分の『発心集』全体の構成の中でどう位置づけられるかという点は疑問のままである。

この点を述べるには集全体の構成についての私見を示さねばならず、ここで十分に論じることができない。一方、42話以下は、往時の説話は「往生の条件」という主題を追求しており、その主題の連続性は36話までたどることができる。一方、42話以下は、往生や発心に対する世俗的諸関係（諸縁）の肯定的・否定的な関わりの様ざまを扱う話群で、これは巻五まで続いている（46・47話は問題が有る）。37話から41話までは、これらふたつの大きな主題話群の橋渡しをするいわば間奏部であって、この部分で主題的関心があまり表面に出てこないのはそのためであると考えられる。

ここで、今まで触れなかった41話に言及しておかなければならぬ。41話は、山門の僧叡実が、天皇の病の祈りに向う途中の路上に病者を見出し、参内を拒んでその世話にあたるという話で、僧が病人に出会って同情するという話の形は40話と共通する。つまり、36話以来の二話一類の連鎖は41話まで及んでいることになるが、編者の関心という点では40話からのつながりはどのようであろうか。叡実は、参内を拒否するに際して次のように述べている。

世ヲ厭ヒテ心ヲ仏道ニ任セシヨリ、御門ノ御事トモアナガチニタツトカラズ。カカル非人トモ又愚ナラズ。只、同ジヤウニ覚ユル也。

ここには、被差別の境涯の「カタワ人」の中に「一山ノ同法」を見出した時の40話の永心の心情の、より普遍的な理念への展開が見られる。40話で、仙人よりはむしろ「カタワ人」に近い存在としての自己の現実に想到した編者は、仏法の慈悲はいかなる境涯の者にも平等であるという41話の理念に、何程かの慰めを見出ししているように思われる。同時に、38・39話の背後に働いていた大寺院への批判的・対抗的意識は、結局は表現の上に顕在化されないまま、他ならぬ延暦寺の僧叡実の口を通して語られる理念の中に、いわば昇華されてしまう。この理念の半面としての、身分的秩序への厳しい相対化<sup>103</sup>したいは、4話・5話・70話などに見られる『発心集』には親しい思想である。ここにおいていわば顕在的主题における『発心集』的なものへの復帰が果たされ、間奏部は終結する。

新しい主題話群の冒頭にあたる42話への、41話の接続には問題が有る。41話の主人公叡実が一時肥後国で世俗的生活を営んだ、あるいは一時悪縁に遇って悪心を発したといった、『法華験記』により

知られる伝承などを隠れた脈絡として、42話の「肥後国」の僧の「悪縁」の話を選びくものか。もしくは41話はエピソードとして、40話に現われた「逆縁」という要素（37・38話で、主人公と師僧との訣別が仏道達成の契機となるのも、逆縁の一種である）が、42話以下の「縁」の主題への伏線となっているのか。いずれにしてもその連絡は強いものでなく、微妙な暗示といった性格のものである。その意味では、41話に説話配列上のひとつの行き止まり、あるいは帰着点を見ることができよう。ただし、それを長明による第二次編集段階といった想定に結びつけるべきかどうかは別問題である。むしろ、そうした想定が作品の理解をどのように進展させるのが問われるべきであろう。私自身は、集の構成の理解と、長明自撰と考え得る範囲を或る程度特定することを優先したいと考えている。

なお、間奏的な話群と主題話群とが交互に現われると見ることによって、集の構成を無理なく了解できるのではないかというのが、現時点での私の想定である。この想定を仮説として整えるためには、「間奏部」なるものの性格と機能をより明確にしていくなければならない。これら「発心集」の構成および原態についての包括的論究は、さらに別稿において果していきたい。

- (1) 「発心集の説話配列」（大阪女子大学「女子大文学」国文篇27、昭51・3）、『中世仏教説話の研究』（勉誠社、昭62）所収。  
 なお、異本にない巻頭三話を、長明による第一次増補部分とする貴志正造氏の見解（鑑賞日本古典文学23『中世説話集』、角川書店、昭52）も有る。

(2) 『中世文学試験』（明治書院、昭59）

(3) 『中世説話文学の研究・上』（桜楓社、昭57）  
 (4) 『鴨長明の説話世界』（桜楓社、昭59）

(5) 以下、引用は慶安四年版本（名古屋大学蔵本の写真・国文学研究資料館蔵）によるが、意味を取りやすいよう一部表記等を改める。なお、注釈上の問題については築瀬一雄氏「鴨長明全集」、同「発心集」（角川文庫）、三木紀人氏「方丈記・発心集」（新潮古典集成）に恩恵を受けている。

(6) 拙稿「発心集」巻一・巻二の主題展開——「方丈記」をも念頭に置きながら——（神戸大学文学部「国文論叢」9、一九八二・3）

(7) 「智海の説話——病者との法談をめぐって——」（愛知教育大学「国語国文学報」42、昭60・3）

(8) 『中世民衆の生活文化』（東京大学出版会、一九七五）

(9) 『中世の精神世界・死と救済』（人文書院、一九八五）

(10) 『法華文句記』のこの文言は、『平家物語』重衡被斬の条に見えることで知られる。覚一本・流布本では、「伝へ聞く、調達が三逆を作り、八万蔵の聖教を減ぼしたりしも、終には天王如来の記別に預り、所作の罪業誠に深しといへども、聖教に値遇せし逆縁朽ちずして、かへって得道の因となる」。以下の重衡の言葉の中に現われる。『法華文句記』の文言は調達についての注釈に関わるのであって、右の重衡の言葉はその文言の受容の在り方を窺わせる。ただし、延慶本・片仮名百二十句本・平仮名百二十句本など「文句記」引用の無い本も多い点、問題がある。

(11) 久松潜一氏「鴨長明小見」（中世文学11、昭41・5）。藤本徳

明氏『中世仏教説話論』（笹間書院、昭52）十一・十二。

(12) 拙稿「往生の条件——『発心集』論のために——」（仏教文学、昭60・3）

(13) 原拠と見られる『続本朝往生伝』では、釈実の言葉は「今生のことを思はざるに依りて、上に天子なく下に方伯なし。」（日本思想大系『往生伝・法華験記』による）という表現であり、趣旨は同じとしても『発心集』の方が徹底的である。

\* 本稿を前任者故原田行造教授に捧げる。

（金沢大学助教授）